



央州寺通信 九月号



菅原祐軌 ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com

「桃太郎」

私の実家は島根県大田市の高林寺というお寺になるのですが、伯父が鳥取県倉吉市で産婦人科病院を営んでいたのもあり、私はその病院で産まれたために出生地は鳥取県倉吉市になります。しかし、その頃、父は東京の築地本願寺で働いていたので、赤子の頃から幼稚園の卒園までは築地本願寺で育ちました。築地本願寺は広くて迷路のようで楽しく、小さい頃はよく築地本願寺の内部や境内などで遊んだ覚えがあります。

その築地本願寺が毎月寺報を発刊しているのですが、数年前の寺報に茨城県の藤本真教先生の話が載っていました。その中で藤本先生は芥川龍之介の「桃太郎」を紹介されていたのですが、芥川版はそれが初見で非常に衝撃を受けました。詳細は青空文庫というインターネットのサイトで見ることが出来ますが、以下概要です。

皆さんご存知の「桃太郎」ですが、川上から流れてきた桃から生まれ、犬・猿・雉と鬼ヶ島に鬼退治に行き、財宝を持ち帰ってくる。この大筋は芥川版でも同じです。しかし、一般的に知られている桃太郎が悪い鬼を退治するという描写であるのに対して、芥川版は少し様子が違います。

桃から生まれて成長した桃太郎はヤンチャで、お爺さんやお婆さんのように野良仕事をして一生を終わりたいくない。そこで、ふと風の噂に聞いた鬼がおり、財宝のあるという鬼ヶ島へ鬼退治に出かけようと心に決めるのでした。正直、そのヤンチャぶりに手を焼いていたお爺さんとお婆さんもようやく厄介払いが出来ると張り切って桃太郎に支度をしてやりました。

さて、鬼というと恐ろしい存在と思われていますが、実は自然を愛する優しい存在でした。鬼の大人達は小鬼が悪いことをすると「人間の所に送ってしまうよ！人間は怖いよー。平気で嘘をつくし、欲深く、仲間同士で殺し合うケダモノ達だよ。」と言い聞かせたものでした。そもそも鬼ヶ島にある宝物もどうやら人間から盗んだものではないようです。

鬼ヶ島に到着した桃太郎一行は破壊と殺戮の限りを尽くし、女・子供を含む鬼達を手当たり次第に殺しました。平和に過ごしていた鬼達の暮らしは桃太郎に壊されたのです。鬼の酋長はたまらず桃太郎に尋ねます。「桃太郎さんご一行がこのように破壊と殺戮をされるにはきっとわけがあるに違いない。一体どのような無礼を私たちが働いたのでしょうか？どうか教えてくださいませ。」すると桃太郎は「日本一の桃太郎が犬・猿・雉を召抱えて鬼ヶ島を征伐しようと考えたからだ。もし不服であるというならばお前も殺してしまうぞ」と何とも自分勝手な理由を述べます。桃太郎は酋長に子鬼を人質に出させ、金銀財宝を載せた荷車を引かせて凱旋するのでした。

これが芥川版の概要ですが、鬼の視点から見た「桃太郎」とでも言ったところでしょうか。この芥川版を読むと本当に鬼は悪い存在だったのだろうかという疑問にかられます。私達は一方的な情報だけを頭に入れ、それが正しいと思いこんではいないでしょうか。

芥川龍之介は近現代を代表する作家の一人ですが、もう一人、近現代で有名な作家に三島由紀夫がいます。三島由紀夫は晩年、唯識思想に影響を受けており、遺作であった『豊饒の海』は唯識をモチーフにされているといわれています。「唯識」というだけでアレルギー反応を起こす人がいるほど少々難解な思想が唯識な

のですが、一体唯識とは何かというと、4-5世紀頃のインドにおいて無著・世親（天親）兄弟によって大成された思想であります。そのまま読めば「唯、識のみがある」というのが唯識であります。正確には「唯、識によって知らしめられている」と考えるのが唯識であります。「識」とは何かというと五識という眼識・耳識・鼻識・舌識・身識という知覚作用、意識という考える作用の六つに末那識（まなしき。自己に執着する作用）と阿頼耶識（あらいやしき。経験や印象を溜め込む蔵のような識）の二つの深層心を足した八識のことです。

私達は普段、五識を通じて意識でモノを考えます。しかし、心の奥深くでは末那識という自己中心性のフィルターを通して経験や印象が種子（しゅうじ。可能力ともいいます）として阿頼耶識に溜め込まれています。この六識・末那識を通じて阿頼耶識に種子が溜め込まれていくことを熏習（くんじゅう。別の言い方では現行熏種子 [げんぎょうくんしゅうじ] といいます）と言うのですが、唯識思想の面白いところは阿頼耶識に熏習された種子が今、現に私たちの外にあると思っている世界を形作っているとするところです。つまり、阿頼耶識というのはただ経験や印象である種子を溜め込むだけではなく、その経験や印象を外の世界に影像（ようぞう。プロジェクションみたいなイメージです。）として作り出しているのです（これを種子生現行 [しゅうじしょうげんぎょう] といいます。）ですから、私たちの心の外に世界があるのではなく、私たちの心の世界を作り出している。このように、一般の感覚で言えば少々「ぶっ飛んだ」思想がこの唯識思想です。

確かに深く考えていくと難解な思想ではあるのですが、個人的には心や自分の感じている世界というものをあらわすには完璧な思想であると思います。個人個人がそれぞれの経験や印象を基に自分だけの世界を作り出して生きているわけです。その世界は本当に正しいものであるのでしょうか？

唯識ではこの認識の構図の他に、モノの見方に三種類ある事を示します。まず私たち一般の人間（凡夫 [ぼんぷ] といいます）のモノの見方を「遍計所執性（へんげしよしゅうしょう）」と言います。これはモノを感知してあれだこれだ考えるモノの見方です。各個人があれだこれだと考えてその考えに執着してモノを感知するわけですから心の外の世界が皆同じであるわけではありません。

次に仏さまはどういうモノの見方をするかというと「円成実性（えんじょうじつしょう）」というモノの見方をします。これはモノをあるがままに見るという見方です。あるがままに見るというのを理解するのは少々難しいですが、縁によって起こっているものを縁によって起こっていると見るということです。

最後に「依他起性（えたきしょう）」という見方ですが、これはモノの本来のあり方です。全てのモノは縁起によって成り立っています。そのようなあり方をそのまま見るか（仏さまの見方）、自分の見方に執着するか（凡夫の見方）によって見方が変わっているということです。

さて、本題に戻りますと桃太郎は英雄だったのかもしれないですが、もしかすると芥川版のように暴力的な悪者だったのかもしれないですね。「実は自分のモノの見方は正しいものではない」という視点にまず立つことによって次に、「ではどう見ることが正解なのか？」ということが疑問としてあがってきます。「どう見ることが正解か」を教えてくださいののが仏さまです。ですから私達は仏さまの教えを聞かさせていただくのですね。

現代社会は自分の見方をさも真実であるかのような主張をされる方々が増えている印象を受けます。もしかするとこれも私の印象なだけであって真実ではないかもしれませんが、わかっていることは凡夫がどれだけこれが真実だと言ってもそれは虚偽なものでしかないということです。やはり大切なことは目覚めたものである仏陀の教えを聞き、その教えを道標として生かさせていただくことでしょうか。芥川版の「桃太郎」を通じて今一度、自分のあり方を考えさせられたのでした。

合掌

文責・菅原祐軌 央州寺駐在開教使

